

IPGP どたばた日記

パリ地球物理研究所 (IPGP) 富士延章

「今日の 11 人の中で一番良かったのはオレグとハオだな」

2015 年 6 月 26 日、我がパリ地球物理研究所 (IPGP) の大講堂で修士論文発表会に審査員として参加していた私は、ほくそ笑んでいた。オレグはクマのような体格だが人懐っこいロシア人で、私が毎日面倒を見ていた学生。ハオは優しい感じの小柄な中国人で、天下のパリ国立高等鉱業学校 (MINES ParisTech) のエルヴェと私の二人で面倒を見た学生だった。

IPGP の M2 課程は、石油会社との連携による国際応用地球物理学コース (GPX: 英語での授業を行う) 10 名程度の学生と、一般の地球科学 (物理・化学・地学) 30 名で構成されており、毎年 6 月の終わりに修士論文発表会が行われる。3 日間、10 名の審査員が大講堂に缶詰にされ、自分の専門外の発表を延々と聞く。全くの分野外でも発表の仕方でもちらも分かった気になるもので、それが好印象に繋がる。論文発表会自体は公開だが、修士論文の審査は、審査員チームと指導教官だけの非公開でその都度行われ、論文、発表、質疑応答、研究生活の 4 つの観点から点数をつける。

とはいえ、やはり自分の学生はかわいいもの。「研究生活」の点は指導教官たちが如何にその学生が素晴らしいかを大演説するのだが、審査員チームはこれには少し聞き飽きており、よほど悪く言わない限り、みな押しなべて同じような点数がつく。況や審査員自身が、くどくどと自分の学生をベタ褒めしようものなら、かえって印象は悪くなる。ここはグッとこらえてオレグをヨイショしないのが得策。となれば、勝負は論文 (2 人の査読者がつく) と発表の印象にかかっている。論文はもう少し頑張れば投稿できそうな匂いがするが、私に似て話下手なオレグが計算地震学の発表を上手く地球化学の人に伝えられるか? 随分と心配だった。自分自身が東京時代にゲラーさんに教えてもらった往年のアメリカの CM ビデオ (“Raid kills bugs dead”) を一緒に見ながら、メッセージを簡潔で何度も繰り返す技術を学んだ。そして最後は、果報は「よく寝ろ」と言って本番当日を迎えた。そんな経緯でのオレグ一位だったもので、私は心のなかでガッツポーズだったものの、点数が確定するまでそれを顔に出すことはなかった。

それにしても、オレグは本当によく頑張ってくれた。12

月の筆記試験はさほど良い点ではなかったが、私のところで研究をやりたいと言ってくれ、研究をはじめたまさにその週から可視化ツールまでついた差分法のコードを書いてきて驚いたものだ。途中一週間ほどトゥールーズの同僚ロランのところに送り出すと、曲線座標のコードを書き上げて帰ってきた。いま私はひと気のない IPGP のオフィスでゆっくりその成果をまとめている。オレグと入れ替わりで、ナンシー国立高等地学学校 (ENSG) からクレマンスが 3 ヶ月の研修で M1 としてやってきてくれて、オレグのプロジェクトを引き継いでいる。

フランスに来て早 5 年、トゥールーズのポスドクを経て、パリの現職に就いて 3 年。IPGP に着いた頃は自分と数年も歳の離れない学生たちに地震学の授業をして、自分よりも数学が数段できるポリテク (数学で有名なフランス最古のグランゼコール) あがりの学生に「どうして非線形項を落とすのですか?」「この項がいつも収束するとどうやって説明できますか?」と毎回のように聞かれていちいち慌てふためいたものだ。英語もフランス語もある程度操れるつもりでいたが、教壇に立つとなるとまた違う。最初の数学の授業 (仏語) で「君たちは僕の最初の被害者です。申し訳ありませんが付き合ってください」と言って、M1 の学生たちが怪訝な顔をしながら失笑していたのをよく覚えている。政治的な理由から地震学と海洋地球物理学の二足のわらじを履くことになり、いつの間にか毎週 2 グループのセミナー係になっていた。そんな慣れない「雑用」に押しつぶされそうになりながら、IPGP 内外の研究者や教務事務、学部生から博士学生にとってもお世話になりながらやっている。

自らすすんで増やした「雑用」もある。採用直後に所長のクロードに呼び出されて「おめでとう! そういえばこの研究所にはまだオーケストラがないな」なんてそそのかされて開設した IPGP オーケストラも今や、大講堂でのクリスマスコンサート、D 論や教授資格審査会のお祝いなどの席での演奏が定番になっている。校外演奏会と銘打って、IPGP の行きつけの飲み屋やセーヌ川にうかぶボートでの出張演奏会を行うまでになり、今後の展開が楽しみだ。飲み屋といえば、19 時くらいになれば教員も学生もみんなこの飲み屋に来てワイワイとやる。日中は分野的あるいは政治的な理由で一緒になれない人間同士もここでは仲間。楽しい夜はあっという間に過ぎてゆく。

こんな感じで毎日どたばた劇がとまらない。しかし、正直に言えば、「雑用」のせいにしながら、他の年配研究者と共同で担当する博士学生・ポスドクの指導で研究をする以外は、最近まで自分の研究までなかなか手が回らなかった。フランス（およびドイツ）では、博士論文で人生の学位論文が終わるわけではない。Habilitation と呼ばれる教授資格取得論文というのがあり、それがないと（国内の制度では）もう一つ上のランクに昇格できない。即ちとても明瞭な形で、“学歴エレベータ”とも言うべき装置が未だ厳然と目の前に置かれているのであり、その威圧感は圧倒的である。我々准教授クラスの研究者はこれを目指して頑張るが、教職ありの大学教員はその出だしが大変だとよく言われる（CNRS という教職なしの研究員職は別）。私も例外なくそれを言い訳にして、なかなか自分の仕事まで行きつけなかった人間だった。ようやく3年目になり、授業の用意に割く時間が減り、私自身がやりたいことに付き合ってくれるオレグにも巡りあい、地に足がついた研究が始まろうとしているのを感じ取っている。好きな仲間と自分の城を少しずつ作れたらいいなと思っている。

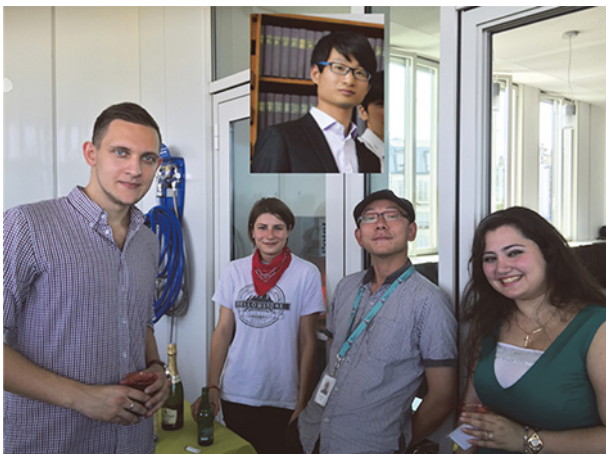
どの国にいても研究生活は大変なことが多いが、この国にいてよかったといえばやはりバカンスの長さであろう。7月14日の革命記念日を機に一気に誰もいなくなり、自分の好きな研究をやったり、海や山や日本に行ったりできる。こんなんでよく国がもってるな、と言われるのだが、もってるのだからしょうがない。IPGPにお越しの際は是非340号室にお立ち寄りください。



筆者が立ち上げた IPGP オーケストラの大講堂でのクリスマスコンサートの様子 教員、ポスドク、学生、秘書等思い思いに楽器を持ち寄って日本・フランスの歌やクラシックを演奏する（“波を扱う”地震学グループの参加率は勿論ずば抜けて一位）



IPGP 若手地震学者 Trois Chauves（三匹のハゲ）のメンバー 左から Martin Vallée, Harsha Bhat, あとの一人は？？



今年指導した修士学生たちと（左から M2 Oleg Ovcharenko, M1 Clémence Cuvilliez, M2 Jiang Hao, 筆者, M2 Claude El Tannoury）



修論審査途中の週末に思い立って行ったオーヴェルニュへの旅行で通りかかった小さな村 Super-Besse にて 偶然 IPGP の名物古地磁気学教授の Jean Besse のことを思い出してパチリ